

第二朗読 使徒パウロのフィリピの教会への手紙 2:6-11

(イエス・)キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

福音朗読 マタイによる主イエス・キリストの受難 27:11-54

- C (そのとき、) イエスは総督の前に立たれた。総督がイエスに尋問した。
- A 「お前がユダヤ人の王なのか。」
- C イエスは言われた。
- + 「それは、あなたが言っていることです。」
- C 祭司長たちや長老たちから訴えられている間、これには何もお答えにならなかった。するとピラトは言った。
- A 「あのようにお前に不利な証言をしているのに、聞こえないのか。」
- C それでも、どんな訴えにもお答えにならなかったので、総督は非常に不思議に思った。ところで、祭りの度ごとに、総督は民衆の希望する囚人を一人釈放することになっていた。そのころ、バラバ・イエスという評判の囚人がいた。ピラトは、人々が集まって来たときに言った。
- A 「どちらを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか。それともメシアといわれるイエスか。」
- C 人々がイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。一方、ピラトが裁判の席に着いているときに、妻から伝言があった。
- A 「あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました。」
- C しかし、祭司長たちや長老たちは、バラバを釈放して、イエスを死刑に処してもらおうようにと群衆を説得した。そこで、総督が言った。
- A 「二人のうち、どちらを釈放してほしいのか。」
- C 人々は言った。
- S 「バラバを。」
- C ピラトが言った。
- A 「では、メシアといわれているイエスの方は、どうしたらよいか。」
- C 皆は言った。
- S 「十字架につけろ。」
- C ピラトは言った。
- A 「いったいどんな悪事を働いたというのか。」
- C 群衆はますます激しく叫び続けた。
- S 「十字架につけろ。」